

二宮附近の低地形

— 地形発達史と地盤運動 —

森 相 昭 子

従来大磯地域の地形及び地質の研究は殆ど大塚弥之助氏によりなされ、地域内部に残存する平坦面区分がなされていると同時にその地質はくみだてられている。筆者は大磯、地域南縁の地帯で大塚氏により中村稔面・現沖積氈氈原面として一括して取扱われている面について、沖積き以降の地形発達及びこの地帯での地盤運動をあきらかにしようと試み、現地での地形及び堆積物の調査をおこなった。その結果次のことがあきらかになつた。つまり、大磯地域南縁の海岸低地は三段の地形面—海岸平野面とこれを開折して形成された二段の河岸段丘面—に分けられ、沖積初期には海におよびわたるがその後三回の西部にたかまる林を相対的隆起運動により低地地形が形成された。及び、地形調査から知りえた地盤運動と大地震の際の変位量とは同じ方向である。

那須扇状地北部の土壤調査

鈴木 友 子

§ I 調査地帯およびその周辺の地形・地質

調査地帯を中心として北部には概観榎輝石安山岩より成る那須火山群が、又北西部に花崗岩より成る大佐飛山等の開折山地、西部に高原火山群がある。調査地帯である戸田地区は、その那須火山の南縁を流れる那珂川と、高原火山の東縁を流れる篤川とに囲まれた那須扇状地の中において、北部の那珂川による扇状地面である穴沢面にある。この穴沢面を構成しているものは表面から表土、砂礫、赤土、砂礫となっている。このことから扇状地表面の礫層の下には凡成火山灰があつて、降灰中に礫の堆積が行われたと秀えられる。又調査地帯とその周辺の範囲では、礫層の上に凡成火山灰の存在を明らかに指摘できるところはない。

§ II 土壤

予定地点は、調査地帯全体に東西—南北方向に200m間隔のメッシュをかけた交点の2/3地点であつたが、実際に採土できたのは145地点でPH